

東京家政大家政 尾中 明代

1. 第3報で女子が西洋服を着はじめたことについて述べたが、第4報では鹿鳴館時代といわれる、上流婦人が洋服を身につけて華美を競った当時をふりかえり、その消長の経緯をかえりみようとする。

明治初年以來、西洋文物の輸入によって、わが国は朝野ともに外来知識の影響下にあった。自由民権の思想が高まり言論界も活発となったが、一方外国の進歩した物質文明に眩惑され物心ともに舶来万能の時代ともなった。明治15年ごろに至って時の政府は、かねて腐心しつつあった条約改正を有利に展開させる一助にと、急激な欧化主義を唱えたのであった。これは日本の貴婦人間にも西洋服が着用される機運になり、特殊な風俗をもたらした一時代であって、洋服業界も設備を増し、外国人の裁縫師を雇い入れるなど、技術も向上し、高級な婦人服を仕立てるようになった。いわゆる鹿鳴館時代といわれる。しかし、反動は国粹主義の擡頭となって現われた。政府の欧化主義、対外政策に対する攻撃は次第に激しくなり、21年伊藤内閣の退陣となって鹿鳴館時代も終りを告げることとなった。つれて婦人の洋装も次第に影をひそめてゆき、業界も閑散になった。その後は皇族の御召料や一部の人たちの洋装以外は、明治の時代には一般女

子の洋装は発展をみるに至らなかつた。

2. 各文献および資料の調査による。

3. 女子洋装の推移をたどつて、これが今日の服装に至る過程の一部を見る。